

●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 4

日本武尊の白鳥伝説

契りあい
二人仲良く
空を飛ぶ
比翼の鳥に
ならんと願う

伝説
そぞろ歩き

草薙の剣を守り続け

熱田神宮の創始に

今回は、草薙の剣にまつわるもう一つの物語「白鳥伝説」について。

見事に東征を果たして尾張に帰った日本武尊は、約束通り宮賢媛命と結婚します。しかし、近江の伊吹山で暴れている神がいることを知り、その討伐に向かいました。その際、草薙の剣を宮賢媛命に預けて出陣します。しかし、伊吹山の神に崇られ、その途中で病に倒れ亡くなってしまいました。その霊が宮賢媛命と草薙の剣に思いを馳せて、美しく大きい白智鳥(白鳥)となって、熱田の地へ飛んで来たといわれています。

これが「日本武尊の白鳥伝説」。この伝説に因んで命名されたのが、白鳥御陵(別名:白鳥古墳)で、古くから日本武尊の墓とされています。すぐ北にある断夫山古墳は宮賢媛命の墓とされ、夫唱婦隨で仲良く鎮座しています。しかし実際は、どちらの墓も、当時尾張の国を支配していた地方豪族の尾張氏の墓という説が有力のようです。

素戔嗚尊から天照大神、瓊瓊杵尊、後姫命を経て日本武尊、そして宮賢媛命と受け継がれた草薙の剣が、日

本武尊の死後、どうなったかという、宮賢媛命は二人の馴初めの地である氷上の里(大高町)で草薙の剣を大切に守り続けました。しかし、年とともに身の衰えを感じ、自分が他界する前に、しかるべき場所に神剣を祀りたいと申し出ました。そこで、尾張一族がこの熱田の地に社を建てて、草薙の剣を奉安することにしたのが、熱田神宮の創始とされています。その後も尾張氏が熱田神宮を祀り継いでいったのです。



▲日本武尊の墓とされている白鳥御陵。



比翼連理の永遠愛が

国境を越えてつながる

ギリシャ神話で剣にまつわる夫婦といえば、前回紹介したペルセウスとアンドロメダです。ペルセウスはヘルメスの剣でメドゥーサを退治した後、妻のアンドロメダを連れて、生まれ故郷のアルゴスへ帰ることにしました。

ペルセウス福国の噂を聞きつけた祖父であるアクリシオス王は震え上がりました。なぜなら「孫に殺される」というお告げを信じていたからです。そこで、こっそりラーリッサという町に逃げました。

ところが、運命には逆らえません。ペルセウスたちの船も風に流されて偶然にもラーリッサの港に避難したのです。ラーリッサでは、年に一度の祭りで、若者たちの競技会がはじまっていた。最後の競技の円盤投げとなり、ペルセウスも誘われるまま出場することになりました。誰よりも遠くまで投げたペルセウスは観客から拍手喝采を浴び、アンコールに応えてもう一度投げました。

すると、前よりも高く遠くに飛び、その時突然激しい風を吹いてきて、風にあおられて、運悪く円盤が見物人の一人の老人に当たって、命を落としてしまいました。その老

4th Letter



▼宮賢媛命の墓とされている断夫山古墳。



人こそ、アクリシオス王だったのです。結局、神のお告げ通りになってしまったという話です。ペルセウスはアンドロメダとともに故郷・アルゴスに帰り、王となり、二人幸せに暮らしました。

日本神話とギリシャ神話では、剣が縁で結ばれた夫婦の幸せの形は違いますが、両者とも「永遠の愛」には変わりありません。中国では唐の時代、白居易の「長恨歌」の最後に「天にあっては願わくは比翼の鳥になり、地にあっては願わくは連理の枝とならん」とあり、仲睦まじい男女のことを「比翼連理」と比喩しますが、実はこれは玄宗皇帝と楊貴妃のことを詠んだ歌なのです。

日本武尊と宮賢媛命、ペルセウスとアンドロメダ、そして玄宗皇帝と楊貴妃。3つの愛が、国境を越えてつながりました。日本武尊と宮賢媛命の二人が、比翼の鳥となり空を仲良く飛翔するさまを思い描いてみるのも、一興です。

次回は、熱田神宮の大櫓にまつわる「平景清の伝説」をお送りします。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材・文/Icarus